

神道国際学会第二回フィールドワーク 京都にて開催、崇道神社、赤山禅院、

椎名潤（岐阜女子大学客員教授・神道国際学会監事）

神道国際学会では昨年10月、実際に神社を訪問し、その歴史的背景や日本文化に与えた影響などを調査・研究しようという「フィールドワーク」の第一弾として、京都・北野天満宮、賀茂別雷神社（上賀茂神社）などを訪れ、参加者から好評を博したが、その第二弾「平安京遷都にまつわる伝説を尋ねるフィールドワーク」が6月11日に実施された。本学会から三宅善信理事長、椎名潤監事とスタッフの3人、世界各国からのゲスト、それに福岡県、茨城県や名古屋から参加の会員ら総勢12人が参加。真夏日の中、数々の伝説に彩られた洛北の崇道神社と赤山禅院（天台宗）を探索した。



真夏日の京都・洛北で平安遷都にまつわる伝説の地を巡る（崇道神社にて）

一行は地下鉄烏丸線の「国際会館」駅に集合し、乗用車に分乗して、左京区上高野の崇道神社へ。

「国際会館」駅からは15分ほどで到着。叡山電鉄「三宅八幡」駅で下車し、高野川の清流に沿って歩いて、10分で行ける。

あたりは歴史的風土特別保存地区に指定され、「山紫水明」という言葉がピッタリと当てはまる雰囲気。道路に面して、崇道神社、伊多太神社、小野毛人朝臣之墓などの名を刻んだ石碑が数基、参道に入口に建っている。

これは後に記すが、ここが崇道天皇を祀る聖域であるとともに、上高野の人々が古くから崇敬してきた氏神なども合祀した村落共同体の精神的な拠り所となってきたことを色濃く反映したものである。

そこからは100mほどの参道が続く。あたりは木々に覆われた境内というより、大きな山裾に迷い込んだ感じがするほどの静寂さである。

参道が尽きると、右手に崇道神社の由来を記した高さ3mの石碑（大正4年建立）、その横

が社務所で、さらに十数段の階段を登って拝殿に達する。拝殿入口の左右には、白砂が円錐形に盛られ、木漏れ日が参詣者を癒してくれる。ご祭神は、皇位継承をめぐる政争に巻き込まれ、非業の死を遂げた後、その御霊をもって朝廷を震撼させるも、一般庶民には広く尊崇されてきた早良親王（死後「崇道天皇」を追贈）。

神域は1万坪を誇るが、社殿の佇まいは誠に簡素である。しかし、非業の死を遂げた崇道天皇を偲ぶには、まさに最適な環境と言える。

一行は、井口忠男宮司の案内で拝殿まで進み、正式参拝。さらに井口宮司から歓迎のあいさつと崇道神社創建の説明をいただく。

井口宮司からは開口一番、「日本の崇り信仰、怨霊信仰の第一番です」という言葉が発せられた。では、なぜ上高野の地に、崇道天皇の御霊が祀られるようになったのか。それはこの地が都の鬼門にあたり、また北陸・若狭街道に通じる交通の要衝の地でもあることと深い関係があ

りそうで、ここに御霊を鎮める神社を創祀したものと考えられる。しかも、新たに社を造営するより、この地の郷社として、古代より護持されてきた格式高い「出雲高野神社」（「神名帳」にみられる式内社の一つ）の社地に「崇道天皇の御霊」を祀り、「崇道神社」と名乗ったのである。

以下は、井口宮司の説明や上高野史跡顕彰会発行の『崇道神社誌』を引用し、崇道神社の歴史を紐解いてみたい。

崇道天皇（早良親王）の実兄は、山部親王（のちの桓武天皇）。父は光仁天皇、母は高野新笠。光仁天皇の皇后は、井上内親王で、2人の間には他戸親王（皇太子）がいたが、井上内親王と他戸親王は、天皇への呪詛の嫌疑が係り、幽閉され、2人とも同じ日に亡くなっている。同じ日ということは、暗殺されたという可能性が高い。光仁天皇崩御の後、その遺詔により、山部親王は天皇（桓武天皇）に、そして早良親王は皇太子になった。当時の奈良は、仏教勢力が強大になってきたため、桓武天皇は都を平城京から山背国乙訓郡長岡に遷都することを考え、藤原種継が造営使として奮闘中だった。しかし、延暦4年（785）、突然、藤原種継が暗殺され、その首謀者として大伴継人ら一族7人が捉えられ、斬首や流罪になった。それに連座して、もともと藤原種継と不仲



フィールドワーク感想文 ①

アンダソヴァ・マラル

国際日本文化研究センター
外国人研究員

6月11日は神道国際学会のフィールドワークで京都左京区にある崇道神社と赤山禪院を見学しました。崇道神社の祭神は桓武天皇の実弟早良親王です。神社はその霊を慰めるために創建されました。神社内にはいくつもの社があり、神社の奥の方は出雲族の神社だったこと、また、出雲族が西の方に追いやられてから、桓武天皇の母方が属す高野族のものとなったことは興味深かったです。謎に満ちている古代出雲やヤマトの歴史が脈々と伝わってきました。

凜とした雰囲気のある崇道神社とは異なり、赤山禪院では猿の姿をした守り神が迎えてくれました。888年慈覚大師円仁の遺命によって天台座主安慧が創建した天台宗の寺院、本尊は赤山大明神です。その神が勧請した泰山府君は中国の五岳信仰にルーツを持っており、陰陽道の祭神であり、死後をつかさどる神でした。

赤山禪院には七福神の福祿寿を祀るお寺もありました。大黒天、毘沙門天、弁財天はインドのヒンズー教、寿老人と福祿寿は道教、布袋は仏教から伝わった神であり、恵比寿だけが日本で生まれた神です。イザナギとイザナミの間に生まれた手足のない蛭子は葦船に入れられ、流し捨てたられ、後に恵比寿として祀られるようになっていくという伝承があります。

様々な国から日本へ渡った神々。それらが修行者によってその姿を変えられ、また日本の神々と習合して、祀られてきています。いまだに生きている伝承や歴史の奥深い世界を体験できた貴重なフィールドワークとなりました。

桓武天皇は第一皇子である安殿親王（のちの平城天皇）を次の天皇に期待していたようで、実弟の早良親王は目障りであった。一方の藤原氏は桓武天皇擁立派。背景には藤原氏と大伴氏の暗闘があったかも知れない。

ところがその後、都では次々に異変が起こり、安殿親王が発病。桓武天皇・早良親王の生母の高野新笠、桓武天皇妃・藤原旅子、同・藤原乙牟漏、同・坂上又子、安殿皇太子妃・藤原帯

だったといわれる早良親王が捕われの身となり、廃皇太子とされて、長岡京内の乙訓寺に幽閉。そして淡路国に配流の途中、無実を訴えるために絶食して、河内国高瀬橋付近（大阪府守口市）で憤死した。



静寂の境内で井口宮司より説明を受ける一行

子相次いで病死し、伊勢神宮も焼失。また疫病、飢饉、洪水などが多発して、都は疲弊。これら一連の出来事が「早良親王の祟り」と噂されたため、早良親王を「崇道天皇」と追尊し、奈良の八島陵に墓を移した。

しかしそれでも、異変が鎮まらなかったため、新都・長岡京は10年で廃都とし、延暦13年（7

94）に山背国（山城国）に都を遷した。これが平安京の始まりである。

崇道神社がある上高野については、古来より、ここを領地としていたのは出雲族で、『延喜式』の「神名帳」には、出雲族が崇祀していたと考えられる「出雲高野神社」の名が記載されている。また湧水の神、農業



フィールドワーク感想文 ②

川西宏明

文明間対話研究所修士課程（トルコ）

6月11日、京都において催された神道国際学会のフィールドワークに参加いたしました。今回は崇道神社、赤山禪院を訪問し、普段旅行者としては訪れることが難しい当社院での宮司様、執事様による丁寧な説明は好奇心を引き立てるものでありました。

とりわけ、崇道神社は知る人ぞ知る「日本の祟り第一号」である早良親王をお祀りされておられ、当社歴は大変興味深いものでありました。他にも、正式参拝の機会を設けていただけるなど、非常に貴重なフィールドワークでありました。

行伊多太神社の名も見える。出雲族の勢力が衰えるに従い、今度は小野氏がこの地の覇者となった。裏山には、遣隋使として名高い小野妹子の子・小野毛人の墓があり、そこから出土した墓誌は大正4年に国宝に指定されている。「神名帳」には小野神社二座が見える。

平安遷都後、不慮の死を遂げた者の死霊は怨霊へと転化し、その御霊（本来はミタマの意味）

による祟りを防ぐために鎮魂のための儀礼が必要であるという信仰が出来上がったため、八所御霊の中でも、最も重んじられた崇道天皇の御霊が、出雲高野神社に祀られることになり、神社の名を崇道神社と改めた。創建は貞観年間（859～877年）と言われている。

こうした変遷を経て、平安遷都間もない時期、この上高野の氏神社に、崇道天皇の御霊が新たに祀られることになった。すなわち、崇道神社は崇道天皇の御霊と出雲・小野両氏族が崇祀した神社や祖霊をも合祀した「小野郷の郷社」という性格を持つ特異な存在であった。

三宅理事長によると、平安京大内裏にある大極殿の「良」（北東）の方角には、一条戻橋・安倍晴明神社、上御霊神社（御霊神社＝御霊社）、そして崇道神社と、「怨霊封じ」「祟り封じ」系統の社が一直線に並んでいるという。

古代から風水や方角、怨霊忌避など、不条理な論理で遷都が行われていたことは確かだが、飛鳥京の真北に平城京、その真北に平安京、さらにその真北に若狹神社・若狹姫神社と御神島が一直線に位置しているのも摩訶不思議で、飛鳥京の真南には熊野本宮が鎮座している。



植野執事の説明を三宅理事長が外国人参加者に通訳する

習合の名残りを留める大きな鳥居が目につく。植野園俊執事のお話では、正式には「天台宗修験道総本山管領所」と称し、比叡山延暦寺の塔頭寺院の一つで、皇城表鬼門に位置するという。

平安京はもともと、青龍・白虎・朱雀・玄武の「四神相応」で知られるように、方位を大切



フィールドワーク感想文 ③

サミール・ヌーハ

同志社大学客員教授

『神道とイスラムの共通点』

6月11日、私は神道国際学会理事長の三宅善信先生の招待を受けて、8世紀末の平安京遷都にまつわる出来事に関係のある崇道神社（859年～877年鎮座）と赤山禪院（888年開創）での現地学習会に参加させていただきました。

われわれは、崇道神社で神式のお祓いを体験させていただいた後、宮司様からこの神社の説明をしていただき、その説明を三宅先生がより詳しく歴史的背景にまで踏み込んで通訳してくださいました。その後、赤山禪院へ移動しました。赤山禪院の執事様からは、三宅先生の助けを得て、いかにその時代の日本の宗教が、神道・仏教・道教、場合によってはヒンズー教が重層的に影響しているかということを考慮に入れながら、この寺院の説明をしてくださいました。

この現地学習会を通して、書物を通して知ることと、実際にその地を訪れて経験することの違いを実感しました。私は、一瞬その時代に生きているかのような錯覚を覚えましたが、イスラム教徒の目から見ても、諸宗教の儀礼には類似性があるということです。神道における清め、例えば、神事の前の手水は、イスラム教徒が礼拝前に行う清めとよく似ています。神道には、榊がありますが、コーランにも祝福された木というものがあります。

私は、この現地学習会で、イスラムと神道と仏教に共通する東西南北の四方についての重要性を知ることができました。われわれは、崇道神社で、北東の方角が「鬼門」であるということを知りました。全世界のイスラム教徒は、サウジアラビアのメッカにあるカーバ神殿の方に向かって祈りを捧げます。

三宅先生の通訳と解説のおかげで、現代の日本人が持つ宗教的寛容性の源泉について理解することができたことに感謝申し上げます。（原文は英語）

にして造営された都で、陰陽道が広く一般にまで信仰されるようになった。陰陽道では北と西は陰、東と南は陽。その境目である東北と西南は、陰陽が反転するところで、「鬼が出入りする忌むべき方角」とされ、東北は表鬼門、西南は裏鬼門と呼ばれている。皇城表鬼門の赤山禪院のほか、平安京大極殿の「寅」（東北東）の方角には、幸神社、比叡山延暦寺、日吉大社などが見られる

赤山禪院は、天台宗の数ある修行のなかでも随一の荒行として知られる千日回峰行と関わり

いただいた。

それによると、最後の遣唐使となった慈覚大師円仁（のちに第三代天台座主）の発願によって建立された赤山禅院は、修学院離宮に隣接する天台宗寺院であり、道教の神である「泰山府君（赤山大明神）」が本尊。

拝殿の屋根の上には、御所の東北東の方角・猿ヶ辻の猿と対応し、表鬼門を守護するしるしとして、御幣と鈴を持った鬼門除けの猿が安置されている。これは本尊の赤山大明神が陰陽道の祖神とされることから、表鬼門を守護する方除けのお寺として信仰されるようになったもので、信仰は民間にも拡がり、赤山大明神のお札を持ち帰り、家に貼ると鬼門除けになると言われている。

猿（申）は、鬼門とは反対の



赤山禅院内に七福神が並ぶ

方角である西南西を指すことから、邪気を払う力があるとされる。赤山禅院の鬼門除けの猿が金網の中にいるのは、かつて夜になると暴れだし、いたづらを繰り返したために閉じこめられたと伝えられている。ちなみに、御所の東北東の方角にある猿ヶ辻や日吉大社にも鬼門除けの猿が置かれている。

赤山禅院には拝殿のほか、本地堂、弁財天堂、福祿寿堂、不動堂など、神仏習合の名残りを見て取れる。特に本地堂では、地蔵菩薩が本地仏として祀られているが、見る人によってその表情が変わるそうで、子供には優しいお地蔵さま、悪いことをし

た人には閻魔さまの顔になるという。

わが国最古の七福神めぐり「都七福神」の一つにも指定されており、福祿寿をイメージした手描きの可愛らしい「お姿みくじ」が好評。

そもそも、この地は平安の昔、時の大納言・南淵年名卿の山荘だったところ。当地の老七賢たちをここに招き、池に舟を浮かべて、詩歌管弦の宴を催していたほど、風光明媚で知られ、今日でも「紅葉寺」として親しまれている。

最後に、これらの社寺が千年にわたって、京の都を大きな災害から守っていたことを忘れてはならない。

神道国際学会 第3回フィールドワークのお知らせ

9月3日(土)に大阪で、物部・蘇我両氏の戦いにまつわる聖徳太子創建の鵜森宮や日本最古の稻荷社である玉造稻荷神社、大坂の陣の際、真田丸からの抜け穴が造られた武内宿禰ゆかりの三光神社をはじめ、日本最古の条里制都市難波宮跡周辺の歴史ホットスポットについて学ぶフィールドワークを開催します。参加ご希望の方は8月22日までに、本学会事務局まで、下記の要領でお申し込みください。

記

- 集合日時：9月3日(土) 13:00 (時間厳守) 集合場所までの交通費は自己負担。
- 集合場所：JR大阪環状線「森ノ宮駅」北改札口(地下鉄「森ノ宮駅」ではない)
- 予定順路：13:00 森ノ宮駅→鵜森宮→難波宮跡→玉造稻荷神社→三光神社→17:00 JR大阪環状線「鶴橋駅」
- 参加費用：2,800円

参加ご希望の方は事務局まで ①参加者氏名 ②会員番号 ③連絡先電話番号(できるだけ、携帯電話など当日連絡がつく番号) ④ご住所 ⑤同行者がいる場合は全員の氏名を、「大阪フィールドワーク参加希望」と明記し、メール(info@shinto.org)またはファックス(03-6805-7769)でお申し込みください。また、参加費用2,800円をフルネームで下記口座へ、8月22日までに振込みください。

なお、お申し込みは神道国際学会会員に限らせていただきます(同行者は会員以外の方も可)。ただし、定員に達し次第、締め切らせていただきます。大阪ユネスコ協会後援。

- 参加費用振込口座：みずほ銀行 丸之内支店 (普)2216796 神道国際学会

※猛暑が予想されますので、軽装でも構いません。 ※昼食は各自で済ませてお集まりください。



近江神宮

マイケル・パイ (マールブルク大学名誉教授)

今回の歴史絵葉書は近江神宮です。山々に囲まれ花が咲き誇り、霞の静寂の中に数々の社がシンプルな輪郭線で描かれた素晴らしい水彩画です。宛名面には右から左への横書きで「きかは便郵」(=郵便はかき)と記されています。「はがき」ではなく「はかき」という言葉が使われたのは1933年より前のことですが、近江神宮は1940年(昭和15年)に創建されたのです。つまり、「きかは便郵」と刻印することで古めかしさを感じさせようとしたのでしょう。これは神宮創建直後、一の鳥居建設の直後に、セットとして作られた絵葉書一枚です。

近江神宮は創建されたのは近代のことなのですが、1300年以上の歴史に誇りを持っています。それというのも、この神宮は天智天皇(在位662~671年)への崇敬の念をもって古の近江の国にちなんだ名づけられているからです。天智天皇は琵琶湖のほとり、大津宮へ短期間遷都なさり、この神宮に天命開別大神として祀られているのです。このような長い歴史を誇る皇統譜へより大きな敬意を払うべきという、当時の政策が関わっていました。戦前には

官幣社と天皇陵への巡礼が奨励されていたのです^{注1}。近江神宮は直ちに官幣社のひとつに組み込まれ、その由緒も全般的に政府政策に合うように説明されたのです。

現在の近江神宮はどのようになっているのでしょうか。最近の境内の案内図と比べてみると若干の違いが見受けられます。絵葉書では中庭を囲む四角形の建物が3つ見られますが、現在の案内図にはそれが1つしかありません。これは時計に興味を持っていた天智天皇にちなんで時計博物館を建設するために、外側の壁を取り払ったためです。本殿は絵葉書には小さく描かれていますが、実際には壮大な建物であり、参拝客はその一部を垣間見られるだけです。社殿を取り囲む森は今も残り、春は特に印象的です。

お参りをして、お守りを買ひ、時計博物館を訪れるだけでなく、参拝客は伝統的な着物を借りることができ、それを着て広々とした境内を散策し記念撮影をすることもできます。近江神宮は、戦後日本の状況に適応し、現在にも過去



を祀る役割を果たし続けていると言われるのでしょう。



注1：愛国的な天皇陵・官幣社巡りについては、著者のJapanese Buddhist Pilgrimage第5章、特に162~168ページをご参照ください。

七年ごとの「御柱祭」を挙行 長野県の諏訪大社

長野県の諏訪大社で今春、七年目ごと（寅年と申年）に宝殿を新築し、社殿の四隅に巨木の柱を建てる「式年造営御柱大祭」（御柱祭）が斎行された。同祭の中でも多くの観衆が押し寄せる「山出し」は上社が四月二、四日、下社が同八、十日に、また「里曳き」は上社が五月三、五日、下社が同十四、十六日に、それぞれ行なわれた。巨木が山を下り、川を渡り、里を行く……。勇壮で豪華な曳行に、諏訪地方は連日、沸き立った。



前宮一之御柱の曳行。触角のように立ち上がった「めどでこ」が上社御柱の特長

諏訪大社は諏訪湖を挟んで南に上社が、北に下社が鎮座する。さらに上社は前宮（茅野市）と本宮（諏訪市）を、下社は春宮（下諏訪町）と秋宮（同）を擁し、都合四社で構成される。建御名方神とその妻神・八坂刀売神を主祭神として祀るが、御神体

は上社が守屋山、下社が御神木。拜殿から直接に拝するため本殿は設けない（上社前宮には本殿がある）。自然に依拠する原始信仰のにおいを残し、御柱祭で木を建てるのも、それに関係があると考えられている。

その御柱祭では、四社それぞれの社殿の四隅に、長さ約十七m、直径一m余の樫の巨木を建てる（総計十六本ということになる）。その起源については諸説があるが、千二百年以上の歴史を持つとも言われる。神輿を納める宝殿の式年造営と遷座が神職の手による神事なのに対し、御柱の曳行と建御柱は諏訪地方の氏子組織が中心となって繰り広げる、いわば神賑わいの祭事だ。

上社「里曳き」、賑々しくも華麗に

「奥山の大木 里に下りて神となる」。五月三日から三日間、里を曳行して宮入りし、建御柱にいたる上社の「里曳き」が行なわれた。

上社の八本の御柱はすでに、茅野市の山中にある綱置場から、勇壮な「木落し」や、宮川を渡る「川越し」などを含む「山出し」を経て、宮川河畔の同市安



上社への「里曳き」に向けて休息する八本の御柱（茅野市の御柱屋敷で）

国寺にある御柱屋敷まで曳きつけられ、そこで約一カ月間、休息の時を過ごしていた。

里曳きの始まる前日、御柱屋敷を訪れると、前宮四本と本宮四本、計八本の巨木が注連縄に結界されて、ずらりと横たわっていた。地元民や観光客らが、再発進を控えた巨木を確認するかのように入り、記念撮影などに興じていた。そばの宮川の土手に上がると、御柱が山から里へ下る際の道標となる「青木の森」と称する小祠があり、里曳き開始を予祝するかの如く、夕日に照らされて輝いていた。

初日は朝八時から、本宮一之御柱を筆頭に、八本が順次、御柱屋敷を出立した。各御柱を担当する地区の氏子が結集し、綱渡しなどの準備を施し、さらには威勢を整えるため、三十分の間隔を置きながらの出発だ。

旗持ち、綱曳きなど、奉仕者は所定の位置に着き、一般の氏子は綱を持ち上げる縄を役員から受け取る。やがて木遣歌とラッパ隊の演奏を音頭に、「ヨ

イサー」の掛け声も勇ましく、曳行に取りかかった。御柱の先端と後端それぞれには、上社特有の触角のような「めどでこ」が二本ずつ屹立している。そこに若衆が鈴なりに立ち並び、房を振りかざしては前進を促す。



鳥居をくぐり境内に参入する前宮二之御柱

前宮は屋敷から一キロほどの距離で、早くも初日のうちに御柱は境内へと曳き入れられた。前宮一之御柱の参入は午後二時。続いて同三時頃には二之御柱が鳥居前に到着した。

しかし「めどでこ」が左右に張り出しているため、大鳥居をくぐるにも技が要る。慎重に間合いをとって、御柱ともども体裁をねじりながら鳥居をすり抜ける。見事、参入に成功すると、思わず観衆から、「やったー」「すごいー」の歓声と拍手が沸き起こった。

境内に入ると、最後の力を振り絞り、十間廊や内御玉殿が並び建つ狹隘な急坂を、御柱は浮き立つように持ち上げられて、

一気に本殿前まで曳き上げられていった。

曳行の道中では、「里曳きの華」とも言われる騎馬行列や各町内の長持ち行列が随行した。各所では同好の人らによる諸芸の披露なども繰り広げられ、大祭を盛り上げた。観衆へのお接待も恒例で、沿道にある企業の従業員らも事務所の前で出店を開き、御酒などを振る舞った。

里曳きのフィナーレ、建御柱が上社本宮で「山の大木が神となる」

二日目の、前宮での建御柱に続き、最終日には、本宮で建御柱が挙行された。境内への一般参入には厳しい規制がかかり、多くの観衆は近くの大駐車場に

下社春宮のそばに「おんばしら館よいさ」オープン

「木落し」のスリル体感コーナーも

御柱祭期間中の四月二十五日、下社春宮の近くに「おんばしら館よいさ」がオープンした。同祭に賭ける諏訪人の思いを知り、その迫力を楽しむ文化施設。

最大の呼び物は、「木落し」の迫力を疑似体感できる装置だ。長大な「御柱」にまたがると、急な木落し坂を滑り落ちるが如く、振動しながら前のめりに傾き始める。目の前のスクリーンには、華乗り（乗り手）の目線から見た光景が映し出され、ド



上社本宮の建御柱——一之御柱が徐々にせり上がる

設けられた大型モニターでの拝覧に。それでも、先端を尖らせる「冠落し」を済ませた御柱が、男衆を乗せたまま徐々にせり上がり、やがて垂直に建ち上がって「神」となる様子を目の片隅に焼き付けようと、大勢の人々が大鳥居の前まで押し寄せ、本宮周辺には終日、熱気が渦巻いていた。



「おんばしら館よいさ」

キドキ感を堪能できる。

ほかに、

祭事の見どころが分かる御柱経路模型、御柱ジオラマ、祭の全貌を紹介する映像コーナーなどがある。各町の長持ちがズラリと並んだ展示も必見だ。外の広場には軽食コーナーや模擬御柱の展示もある。

下諏訪町一六八ノ一。九時～十七時。休館は年末年始、および火曜（祝日の場合はその翌日）。入館料は大人三百円。

平成二十八年諏訪大社 式年造営御柱大祭

岩澤知子（麗澤大学教授）

諏訪の御柱祭は日本三大奇祭の一つで、その勇壮さ、奇抜さゆえに、近年、多くの注目を集めている。諏訪の人々が口にする御柱祭の合言葉は「奥山の大木、里に下りて神となる」。そう、この祭りは本来、奥山と里をつなぐものだ。4月から5月にかけて行われる御柱祭の二大行事が御柱の山出しと里曳きであることは、このことを物語っている。

御柱は元々、諏訪を見下ろす八ヶ岳山麓の御柱山から切り出されていた。この御柱山から諏訪大社上社へとつながる御柱街道は、一直線に山と里とを結んでいる。八ヶ岳から切り出されたモミの巨木は、厳しい冬の寒さを生きのびる諏訪の人々にとって、荒々しい野生に満ちた山の神を象徴する。この巨木の山出しが行われるのが、雪が舞うような寒さが残る4月上旬。勇壮に姿を整えた御柱が、八ヶ岳の峰々をバックに、その巨体を引きずりながらゆつくりと山を出ていくのである。山出し終着点の御柱屋敷までの約12km、氏子たちは三日をかけて荒々しい巨木を曳いていくのだが、この曳行は、まさに非日常の祭りの時間である。参加する者一同が、木遣り唄のリズムにのせ声と体を合わせながら、延々御柱を曳く。数時間おきの休憩地点では、にわかに宴会が催され、緊張がふつと解ける。こうして進んでいく氏子たちの間には、恍惚に近い一体感が生まれ、その恍惚感に包まれた人々は恰もこの野生に満ちた山の神「御柱」の霊力を里に撒き散らすかのよう

に神社へと運んでいくのである。山の神の里入りだ。

この恍惚の最高潮は高さ約19mの丘を御柱が一気に滑り落ちる木落としであろう。このとき人々は、山の神「御柱」によって象徴される野生の本質を、自らの身体の内に見出す。御柱祭は、実に性の要素に満ち溢れているのだが、その表現は男性的なものが多い。そもそも御柱そのものが男根崇拜を彷彿させる。古代信仰において、勃起した男根を拝むというのは、自然霊のパワーを自らの内に引き込み、多産・多動の恵みを祈ることもあった。木落としとは、八ヶ岳山麓から延々母なる大地に擦り

つけるようにして里まで曳きずってきた御柱を一気に急な坂から落とす儀式なのだが、これが男性のあの瞬間の暗喩であることは言うまでもないだろう。氏子たちにとっての御柱祭は、この木落としの瞬間のためにあると言っても過言ではない。それは、単調な日常からかけ離れた死に直面する、そしてそれゆえにこそ、人間の生が最も躍動する一瞬なのだ。

最後に、この御柱祭が盛大な祭りへと発展していったのが、室町時代以降だったという事実は興味深い。その時代の社会構造の変化が惣村にもたらした多大な経済力の蓄積が、この祭りを可能にしたことは想像に難くない。さらに惣村の発達によって、それまでは未分化だった「人の住む里」と「野生の山」との距離が増大し、人間と自然との間の心理的な分断が広がっていったことも想像される。世俗的な世界に、六年に一度、山からもたらされる巨木が野生の力を振りまいて暴れ、里と山との心理的分断を無化する力の象徴として乱入する。その時、この御柱は、日常世界では隠れている人間の野生性を垣間見せるものとして、我々を魅了する。というのも、この混沌のあとにやってくるのは、自らの内なる活力の再生なのだから。こうした里と山との分断は、現代において一層拡大している。諏訪の御柱祭が今なお多くの人々の心を惹きつける理由の一つが、ここにあるのではなからうか。

連載 神道DNA

『攘夷を叫ぶだけでは…』

金光教尾尾教会 総長／(株)レルネット代表 三宅善信

EUからの離脱の可否を問う国民投票が英国で実施され、その結果が世界経済に衝撃を与えた。20世紀前半の二度にわたる世界大戦の結果、「世界の中心」の地位をアメリカに譲ることになったヨーロッパ諸国が、域内で二度と戦争を起こさず、相互の文化を尊重しつつ政治経済統合を進めるという壮大な実験をドイツ・フランス・イタリアが中心となってEEC（欧州経済共同体）としてスタートさせたのは1957年のことであった。爾来、半世紀以上の長きにわたってこの実験は成功を収め、加盟国数は順調に増加していった。特に、1989年の「ベルリンの壁崩壊」はエポックメイキングな出来事であった。それまで西欧の資本主義諸国と敵対していた東欧の社会主義政権が雪崩を打って解体し、逆に、旧社会主義諸国にとっては、一年でも早くEUに加盟させてもらうことが一等国の証しであるかのような趣を呈した。

加盟各国が通貨発行権など、その主権の一部をEUに差し出すことによって、加盟国数28カ国、域内の総人口5億人という巨大な単一経済市場と化したEUの実験は成功したかに見えたが、その統一通貨ユーロの強い信用力を悪用したギリシャのような

国家が現れたことによって陰りの見えてきたEUは、2015年、北アフリカ地域やシリアからの難民の大量流入による社会不安とテロ事件の続発、また、東欧の旧社会主義地域からの安い労働力の英国やドイツといった「域内先進国」への移民の急増が、社会不安や既得権の喪失に繋がると危機感を抱いた人々に過激なアレルギー反応を起こさせたのが、今回の英国のEUからの離脱という事件であった。

今回の国民投票に際して離脱派の行った主張は、過激なナショナリズムや「大英帝国」といった美化された懐古趣味、既成の政治エリートへの不信任感、単純労働者から仕事を奪い、安寧だった「古き良き社会」に犯罪を持ち込んだのは移民であるという身勝手な論理であるが、この論法が大衆の心を鷲掴みにするということは、英国での国民投票よりも半年先行して、まさにこの論法を駆使して、選挙キャンペーンを成功させ政治的パワーにのし上がった男が大西洋の対岸で証明している。共和党の大統領候補ドナルド・トランプ氏である。

アメリカ人労働者の職を奪うメキシコからの不法移民の流入を防ぐために「国境に壁を！」と吠えた

り、テロリストの米国侵入を防ぐために「イスラム教徒の入国禁止！」を主張するなど、従来なら公的な立場の人が口にしただけでその立場を追われるような政治的公正性^{ポリティカルコレクトネス}をまったく無視した差別発言を平然とするようなトランプ氏の様子をテレビでドンドンと垂れ流してきたことも問題であるが、それよりも深刻な事態は、本来、それを批判して理路整然と正論を主張すべき「プロの政治家」や経済エリートたちの言葉を誰も信用しなくなったことである。

世界の各国が複雑に依存し合っている現代社会において、それぞれの民族が声高に「攘夷」を主張するだけではなんの問題解決にもならないことは、日本ですら150年前にすでに証明されていることである。既成秩序が流動化した時代に、幕府のエリート政治家たちには何事もなす術が無かった。低い身分の幕末の志士たちが、明治維新を成功させることができたのは、自らの立身出世はもとより、各藩・各家の利益も度外視して、「日本国全体」のためにどう奉仕できるかという一点から「尊皇」という政治的行動を起こしていったからである。100年後の未来において、「世界が決定的に悪くなったのは2016年のあの時であったな…」とマイナスの評価をされないためにも、今を生きるわれわれが真剣に考える必要がある。

話題のこの人

伊勢や尾張の貨幣構造を探る

千枝大志氏

中京大学文学部学芸員



「信仰」と「信用（貨幣・金融）」は表裏一体

民衆の間で波の如く流行を繰り返してきた伊勢信仰。その伊勢の隆盛を、経済的なメカニズムから追求するという異色の角度で捉えた論考を発表した。

「お伊勢参りが普及し、門前が繁盛する。そこには『信仰』と為替などの『信用』の密接な関わりがあった」と指摘する。『そんな経済史研究は王道でない』と、経済学部や経営学部出身の純粋な経済史プロパーからは言われたけど、中世社会は多かれ少なかれ宗教が絡む世界。だから最近、そんなアプローチも注目されるようになりました」

中近世の社会経済史が専門。貨幣流通の実態を、各地域の特性を加味しながら探ってきた。「特に十六世紀になると渡来銭が入ってこなくなり、貨幣不足になる。そこで堺などで密造が盛んになって、悪銭も広まった。商業組織も地域ごとに複雑になる。まさにカオス状況ですが、では伊勢は？ 厳島は？ 出雲は？ ……」と、定点観測を始めたわけです」と経緯を語る。

宗教行為と経済活動は、結果

的に「表裏一体だ」と見る。「近江商人は多賀大社と関係を持っていたし、立山信仰の御師が全国に葉を配ったのが越中富山の薬売りの発祥です」

伊勢はというと、大神宮なので貨幣史といった俗から覗くのは気が引けるが、「皇祖神を祀るからといって、経済活動がなかったはずはない。現に宇治と山田の門前町があったし、神宮史料からも、信仰と信用の緊密な繋がりが分かる」と断言。「お金の取引は信用がないと成立しない。その点、神社は信仰に依っているから金融規律もしっかりしていたんですね」

神宮の経済活動における御師の存在は無視できない。「御師が全国を廻るわけですが、今でいう間金融的な高利貸が多い中で、信頼できる御師という宗教者がお金を貸してくれる。もともと『そのかわり伊勢参拝の時には、うちに泊まってね』とか『お賽銭を出してね』とか言うわけですけど……。しかし借りたほうも『何しろ大神宮から借りたのだから、しっかり返済せねば』となる」と、相互了解の成立を見いだしている。

慶長年間の後半に日本初の紙

幣「山田羽書」が外宮の神職らの手で発行されたことについて、山田羽書は後の藩札のプロトタイプ。幕府は各地の藩札を黙認したけど、特に伊勢は検地も入らない神領だし、そうした紙幣を自発的に発行するのは容易だったのでは」と推測する。

最近尾張の津島神社に残る史料に着目。「上方の銀使い、江戸の金使い。それがクロスするのが伊勢や尾張で、いわば列島における貨幣流通の境界域になっている」と指摘している。

伊勢や津島に限らず「神社史料には賽銭や布施に関する記事も結構残っていて、貨幣史研究の滞っている部分を埋める意味でも価値が高い」と強調。思想や儀礼の記載も大事だが、「俗なる面の記事も多くあって、当時の地域社会の構造を見ると、それを活用しないのは勿体ない」と話し、社寺と経済を絡める「エアポケット的な研究」への取り組みを重ねている。

本居宣長記念館研究員、皇學館大学助教などを経て現職。博士（文学）。社務所や旧家に残る古文書などを保存するアーカイブ活動にも尽力中。著書に『中近世伊勢神宮地域の貨幣と商業組織』ほか。この六月、NHKテレビ「プラタモリ」の《伊勢編》では案内役を務めた。

を結ぶ「芸能」の本来の姿が立ち上がる。全部で四座の神楽の最後を締めくくのは「山の神」と名付けられた演目。しゃもじと鈴を持った、おどろおどろしい醜女がここでの主役だが、この神の名は磐長姫。大山津見神（大なる山の神）の娘であり、天孫ニギノミコトの妃となった美しい木花咲耶姫を妹にもつ。「磐長姫は妹神とは違い不美人な神であったが、大変な働き者であった」との神主の解説のもと、荒々しい舞いののち、この醜女が最後に観客に無病息災を象徴する「餅」を投げつけて神楽は終了する。御嶽神社が祀る山の神とは、このように「恐怖」と「恵み」の両義性をもち、魍魎魍魎の性格を備えた魔性の力であることを、実に味わい深く伝えてくれる神楽舞と言えようか。

翌朝、宿坊の神棚で一同お祓いを済ませたあと、夜明けの山道を小川に沿って小一時間ほど登り、ようやく禊場である綾広の滝に着く。自らの気を奮い立たせたあと、もう一度ゆっくりと息を整え、滝に入り、御岳山が育んだ水と一つになる。その滝の中に立ったとき、今昇ったばかりの朝日を受けて黄金色に輝く木々が目の前に広がった。古代から続く山の神への信仰、中世の修験道、近世・近代の御嶽講、そして現代へと、様々な伝統が共存しながら今に続く御岳山。この小さな関東の神社の中に、様々に変容しながらもそれらすべてを含み込みつつ現代へと繋がっていく、日本の信仰のあり方の縮図を見る思いがした。

人々の社寺詣が盛んになる近世、崇敬者たちは「武州御嶽講」という講社を組織して、「五穀豊饒をもたらす水源の神」である御岳山に参拝し、毎年の収穫を感謝するとともに、次年の豊作を祈願する。雨が少ない年には、「雨乞い」の儀式も行われたという。講社では、村の人々が交代で御嶽詣を行う。何年もかけて代参が一巡し、村の講員すべての参拝が成就したとき、講員全員で山に登ることを「太々講」といい、その記念に、山の神に「太々神楽」を奉納するのがしきたりであった。御嶽の神楽は、代々、神職によって継承されている。筆者が同行した武道グループでも、翌日の滝行の無事遂行を祈願して、この「太々神楽」を奉納した。御嶽の神とは、五穀豊饒をもたらす水源の神であると同時に、荒々しい野生を象徴する山の神。それは山から降臨し、里人と共に舞い遊び、里人を守護する神である。神楽とは、そのような「神」を喜ばせて降臨を促すためのもの。従って、それはあくまでも、人ではなく、神に向かって演じられる…このような神主の説明に、人と神



太々神楽
山の神



神社巡り⑦

岩澤知子
麗澤大学教授

武蔵御嶽神社〈修行編〉

●東京都青梅市御岳山176番地

秋も深まる2015年11月上旬、筆者がこの御岳山を訪れたのは、ある武道グループが修行の一貫として行う「滝行」に同行するためだった。早朝の日の出とともに禊を行うため、前日に入山し、山頂の宿坊に滞在。御岳山の山頂には現在30数件の宿坊が存在するが、この宿坊を営むのは「御師」と呼ばれる人々で、宿坊の主人であると同時に、御嶽神社の神主でもある。御嶽神社の神主になるためには、一週間にわたる御籠もりが「伝法」として課され、その期間中、おかゆのみの食事とともに、毎朝夕の滝行が必須であると聞いた。この御岳山の滝で「身削がれて」初めて、神職となる資格を得るのだ。筆者が宿泊した宿坊のご主人は33代目で、祖先は鎌倉時代からこの御岳山に住み着き、集落を形成していたらしい。御岳山信仰が隆盛を極めるのは、しかしその後、江戸時代に入ってから。御岳山は江戸の西に位置する守り神として、徳川家の「武運長久」の祈願を始めとする祭祀の執行を任された。現代まで引継がれる御岳山独特の「太々神楽」（東京都無形民俗文化財に指定）も、この頃、確立したという。

房総の伊勢信仰

千葉県神社庁「房総の伊勢信仰」企画委員会[編]

雄山閣、2013年9月刊、316ページ、ISBN978-4-639-02221-3、5,000円(税別)

評／芳村正徳(神習教教主)

本書は、第六十二回神宮式年遷宮に向けて千葉県神社庁の神職たちを中心に広報活動の一つとして編纂されたものであるが、その構成と主な内容は次の通りである。

第1章 海流と文化

古くは『古語拾遺』から始まり様々な資料に見られる記述、漁業、醤油を例に挙げ、太平洋沿岸の海上交通路が古くから重視され確立されていたことなど紀伊と房総のつながりについて述べている。

第2章 房総の神明神社―伊勢の神宮の御分社―

神明神社と神明神社以外で天照大神を祭神とする神社にも焦点を中て創建、由緒、実際の信仰とその変遷などを調査し考察をしている。

第3章 御厨神明と在地信仰

御厨が社家主導による神領拡大の意欲の表れであった可能性や源頼朝が東国の第二の伊勢神宮を建てようとしていたという推察と共に、当地の御厨と神明神社を中心とした信仰について論じている。

第4章 江戸時代の大麻頒布

全国の大麻頒布と国民総奉賛の基盤には、祈祷、神札頒布といった信仰から娯楽までを含めた旅行代理店の役割を果たしていた江戸時代の御師の活動があったことについて触れ、房総における御師の活動について論述している。

第5章 昔の伊勢参り―参宮日記から―

全国的な参宮人気の要因や背景を探りつつ、県内に残る参宮に関する日記、道中記などを詳しく検証している。そこには道中のグルメの楽しみから当時の物価を探ることもでき、さらに伊勢に到着してからの参宮の実際などを垣間見ることができる。

第6章 房総の伊勢講と伊勢大神楽

この章では「伊勢講」の一年間の活動の流れ（講の集まり、代参者の出立と帰

着他）、現在に至るまでなどが論述されている。そして一般的な「神楽」の解説や伊勢から移住した館三太夫によって拡められた「伊勢大神楽」について詳述している。

第7章 絵馬の奉納

村をあげての一大事業であった伊勢への参宮を誇らしげに示すと同時に参宮未経験の人々に知らせる目的で奉納された伊勢参宮に関する絵馬、そしてその形式の移り変わりや江戸時代から昭和までの千葉県内の伊勢信仰絵馬分布の変遷などについて述べている。

第8章 房総から伊勢の神宮への供祭物

神宮の三節祭、遷宮における諸祭、神嘗祭の神饌と安房からの供祭物を資料から考察している。

第9章 近年の遷宮奉賛活動

戦後の遷宮奉賛活動について述べている。特に第59回遷宮では4年の延期が決まった昭和24年当時の陛下の仰せ（朝日新聞）やGHQの動き、神社本庁評議委員会の決議、神社新報の記事などに触れている。

本書は専門の研究者ではなく、兼務社を持つ複数の現役神職によって、神宮司庁、神宮文庫、各神社などを巡りつつ非常に丁寧かつ詳細に記されており、執筆中の苦労は想像するに難くない。

また、国内各地域において現代まで行われてきた伊勢信仰の実態をより明らかにするためにも同様の研究の全国的な広がりをも期待してしまう。

人口の過疎化と過密化が同時に進む中で、房総の地が古くから伊勢への思いを持ち続けてきた姿を本書を通して紹介しつつ、編纂に携わった神職たちの未完成作品である本書がきっかけとなって県内の人々の伊勢崇敬の気持ちを高揚させたいという思いが将来実を結ぶことを願いたい。



Gods of Medieval Japan. Vol. 1: The Fluid Pantheon. 482pp. Gods of Medieval Japan. Vol. 2: Protectors and Predators. 497pp.

Bernard Faure [著]

Honolulu 2016. University of Hawai'i Press.

評／マイケル・パイ(マールブルク大学名誉教授)

この立派な二冊で、神道と仏教の間に見える神々、明王などが幅広く研究されています。著者によるとよく使われる「神仏」という概念は表面的には便利であっても、次の現象を正しく言い当ててはいません。実際には、たとえば『古事記』に出る神々と宗派仏教の様々なご本尊を「神」と「仏」として区別することはできますが、日本の宗教的風景に存在するたくさんの「かみさま」はそういう範疇には属しません。そのために、中世からの神仏習合という概念に疑問が残し、明治時代の神仏分離という政策も最終的にはっきりした成果を残さなかったのです。

こういう日本の聖なる存在の数々はより複雑であり、著者はその謎を分析して説明する努力をしてくれています。言うまでもなく真言密教または天台密教の題材が多いですが、著者が見ている現象は単に真言や天台の教義をもって定義づけることはできません。それよりも、仏教・神道・民俗宗教のあいだに、教派の界を超えて流れる多面的な象徴を見ているのです。

第一冊では妙見、不動、愛染、一字金輪と如意輪観音、第二冊では毘沙門天、大黒天／大国主、閻魔法王(閻魔天、閻魔王)、ダキニ天や稲荷、弁財天、宇賀神、摩多羅神、荒神などが主に登場します。一般的な意味で仏でも、神社神道の神でもなくて、その間で揺れ動き、危険も安全も表す超自然的な存在になります。数多くの曼荼羅、お札、掛け軸などの画像によって非常に詳しい要素を発見してその神々（といってもよろしいだろうと思うのですが）のあいだのつながり・関連性を見せてくれます。著者が集めた題材は主に中世のものですが、江戸時代まで及んでいます。読者がこれを全て楽しんで身につけていくと、日本の宗教文化の宝を理解しながら、「神仏習合」や「神仏分離」のような簡単過ぎる概念では足りないことが必ず分てくると思われます。



ジョン・ブリン副会長

ここ1年間は京都、東京、伊勢、ロンドン、ハイデルベルグ、シアトルなどで伊勢について、そして近代皇室について発表してきた。伊勢志摩サミットを前に『変容する聖地 伊勢』（思文閣2016年）を世に出すことができたのは、特に嬉しかった。この本は伊勢神宮の長い歴史を視野に入れ、伊勢の様々な転換期に焦点を絞った論文集であり、とくに一般の読者向けにまとめたソフトカバーのちよつと面白い本に仕上げた。

著書

『変容する聖地 伊勢』（編著）思文閣、2016年

論文その他

「戦後の伊勢 プリントメディアにみる神宮と式年遷宮」(フリーン編『変容する聖地 伊勢』思文閣、2016年)276-295頁

「海外における神道研究」『鴨東通信』102号(2016年)

「伊勢神宮と国家儀礼…その歴史と政治を巡って」(島蘭進と対談)『世界』883号(2016年6月)、197-206頁

「天皇の外交と国際認識…1868-94年」小風秀雅編『大学の日本史…教養から考える歴史へ4近代』山川出版、2016年

「近代の宮中儀礼…天皇に求め

られた政治」明治維新史学会編『講座明治維新11…明治維新と宗教・文化』有志舎、2016年、160-188頁

“Yasukuni: The Tokyo shrine to the Japanese military war dead,” in John Stone et al. eds., *The Wiley Blackwell Encyclopedia of Race, Ethnicity, and Nationalism*, Wiley Blackwell, 2016

「問題提起：これまでの歴史をふりかえって」『キリスト教と神道との対話：二つの宗教が探る強調への道筋』NPO法人神道国際学会、2015年、17-22頁

“Undermining the myths: Habian’s Shinto critique,” in Baskind, James and Richard Bowring eds. *The Myotei dialogues: a Japanese Christian critique of native traditions*, Brill, 2015, pp. 36-42.

“On Shinto,” in Baskind, James and Richard Bowring eds. *The Myotei dialogues: a Japanese Christian critique of native traditions*, Brill, 2015, pp. 147-165.

芳村正徳理事

3月15日 公益財団法人日本宗教連盟理事会出席

4月11日 教派神道連合会理事会出席

4月13日 宮本文晴大導師・宮本ミツ会主を偲ぶ会参列

4月14日 公益財団法人日本宗教連盟創立70周年記念式典参列

5月11日 教派神道連合会理事会出席

6月6日 公益財団法人日本宗教連盟理事会出席

6月9・10日 第17回神道講座出席

ファビオ・ランベリ理事

この一年間、神道の「神学」(カミの存在論や表象論(カミの本質やその表現方法)の歴史に関する研究を遂行してきた。特に、九州北部で行ったフィールドワークや資料収集が有意義だった。研究成果は、国際シンポジウム(アメリカ、日本、中国、イスラエルなど)で発表し、授業や大学院のゼミで適用した。これからは、多様な思想体系や

儀礼要素がどのようにして神道の神学や表象論を形成してきたかについて、論文をまとめ刊行する予定である。

こちらカリフォルニア大学・サンタバーバラ校では、2015年11月に文献研究の新方向性に関する国際ワークショップ(日本仏教および神仏習合関係資料の分析方法論について)を開催し、早稲田大学、東京大学、京都大学、東北大学などの研究者が発表し、大学院生のワークショップを行った。

また、2016年6月に、国際シンポジウム「海から見た日本宗教史」を開催した。カリフォルニア大学・サンタバーバラ校、神道国際学会神道研究寄付講座主任、東アジア言語およびカルチャースタディーズ研究科主催、

上田正昭先生を偲んで

神道国際学会理事長 三宅善信

三月十三日、本会の設立準備段階から設立会員としてご教導くださった歴史学者の上田正昭先生が帰幽された。享年八十八。上田先生は、記紀などの文献に頼りすぎ、とかく日本列島内のことだけに限定しがちな日本の古代史を、北東アジア(環日本海)諸国とのダイナミックな関係性の下から見るといふ視座を学会にもたらせた泰斗であられた。

二〇〇一年の歌会始の召人をされた際に、天皇陛下から直接、当初は高さ十六丈だった出雲大社の心御柱の建設方法や荒神谷遺跡で大量に発掘された銅剣のことなどについてご下問された時のことを、その直後に上田先生から伺った際、目をキラキラさせて語ってくださった時のことが今も忘れられない。御霊の安心をお祈り申し上げます。



「初詣の社会史」

平山昇、東京大学出版会、2016年

「日本会議の研究」

菅野完、扶桑社、2016年

『愛国と信仰の構造 全体主義はよみがえるのか』

島蘭進・中島岳志、集英社新書、2016年

『明治期の天皇と宮廷』

安在邦夫・真辺将之他編

『昭和前期の神道と社会』

阪本之丸他編、弘文堂、2016年

『絵画資料が語る祇園祭』

河内将芳、2016年

『講座明治維新11…明治維新と宗教・文化』

明治維新史学会編、有志舎、2016年

神道国際学会からのお知らせ

- ◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
 - ◎ご入会のご案内:神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。
- | | |
|----------------|-----------|
| 一般会員(年会費) | 3,000円 |
| 賛助会員(年会費) | 10,000円 |
| (法人会員(年会費) | 100,000円) |
| 特別賛助会員(個人・一時金) | 30,000円 |
| 特別賛助会員(団体・一時金) | 500,000円 |

NPO法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729 Fax. 03-6805-7769 info@shintou.org

編集後記

読者の皆さんにお別れを告げる時となりました。私ブリンはこの53号の刊行をもって編集長を退きます。ごく短い期間でしたが、47号から編集の責任を引き受け、楽しく仕事をさせていただきました。体裁など若干の変更を施しただけで、これといった遺産を残さないまま去っていきます。この間中、縁の下力持ちは岩澤常任理事とISSA事務局長で、彼女らのサポートがなければ『神道フォーラム』は日の目を見ることがなかったに違いありません。私は少し距離を置きながらも『神道フォーラム』の愛読者であり続けます。皆さんが新しい編集体制を応援してください。よろしくお願い致します。